新島八重らの冥福祈る

若松の大龍寺で顕彰祭

NHK大河ドラマ「八重の桜」で描かれた新島八重の顕彰祭は命日の十四日、八重の実家・山本家の菩提（ぼだい）寺である会津若松市の大龍寺で行われた。八重や、京都の近代化に貢献した兄・山本覚馬らの冥福を祈った。

仏式とキリスト教式で行われた。初めに大龍寺の増子大道住職が読経し、関係者が焼香した。引き続き、牧師の山下勝弘同志社校友会県支部長が祈りを捧げ、キリスト教徒だった八重らを弔った。参列者が賛美歌を歌った。

顕彰会の慶徳栄喜会長が「現在のわれわれは新型コロナウイルスと闘っている。感染者を差別する風潮が残っているが、八重さんなら本来あるべき人間の良心に従って行動しようと呼び掛けたのではないか」と祭文を読み上げた。

顕彰祭に先立ち、同志社女子大の吉海直人特任教授が「新島八重最大の謎に迫る―川崎尚之助の復権をめざして」と題して講演した。

仏式とキリスト教式で行われた新島八重顕彰祭

旧友への短冊 公開

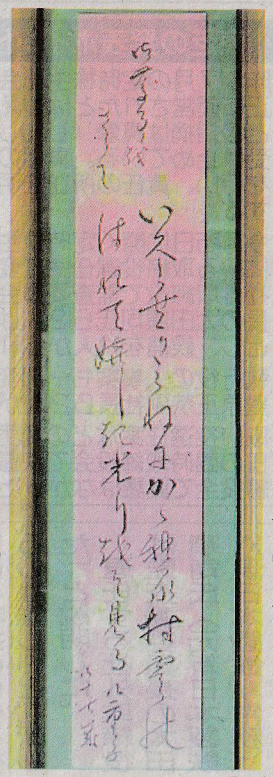
講演会 最晩年の八重贈る

講演会では、八重が最晩年の八十七歳の時、幼なじみだった日向ユキに贈った和歌の短冊が披露された。

和歌は、会津松平家の勢津子さまが秩父宮妃となられた際の心境を詠んだ「いくとせかみねにかかれるむらくものはれてうれしきひかりをぞみる」。

ユキは戊辰戦争後、斗南藩、北海道と移り、開拓使官吏の旧薩摩藩士内藤兼備と結婚した。吉海特任教授が数年前、内藤家の子孫から「公的に使ってほしい」と預かり、初めて持参した。

吉海特任教授は「八重とユキが晩年まで交流していたことを示す資料だ。最後のお別れに贈ったのではないか」と話している。



最晩年の八重が贈った和歌の短冊

会津藩殉難者墓地で会津藩士らの冥福を祈る参列者

幕末の会津藩士弔う

京都会津会が殉難者慰霊法要

幕末の京都警護や鳥羽伏見の戦いで命を落とした会津藩士らをしのぶ京都会津会（大竹文夫会長、会員九十人）の第百十六回会津殉難者慰霊法要は十三日、京都市の金戒光明寺西雲院で営まれた。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため規模を縮小し、役員ら約二十人が参列した。本堂での法要の後、隣接する会津藩殉難者墓地でも焼香した。会津松平家の松平保久十四代当主、室井照平会津若松市長、柳沢秀夫会津会会長からメッセージが寄せられた。

法要の幹事を務めた小西雅彦幹事長は「少ない人数でも、先人に対する崇敬と哀悼の意を表するために法要を継続することが大切」と語った。

金戒光明寺は一八六二（文久二）年に京都守護職に任ぜられた会津藩主松平容保が家臣千人を率いて京都に到着した際、本陣を置いた寺として知られている。